

せ た か む い

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十三号 (一日発行)
平成七年十月一日

北海の古平風土物語

三九

古平名所「偕楽園」

—まぼろしの古平鯉公園—
高橋源 五口

大きな池には、蓮・アヤメなどが植えられ、大小たくさんともも言っていた南部栗(小粒で山栗大粒であった。この丹波栗の生育地は、古平・小樽辺りが北限であるという。公園の入口には、当時、人目を引くようなハイカラな洋風建ての管理人住宅があり、若山さんの一家がここに住んでいた。

の池のほとり西側の一角には、凝った瀟洒(しょうしゃ)な別荘が建っていて、園内の数か所には東屋や休憩所も作られていた。

そして、公園の一隅には草花園や果樹園もあって、当時としては珍しい草花や果樹の類がたくさんあった。

また園内に、古平町の開拓の始まった明治初年、本州から持ってきた幼苗を植えたという、樹齢数十年の丹波栗十本ほどの

一群があった。毎年秋になると大きな実がなつて、それを珍しく眺めていたものである。家で

鯉漁期が終わる五月の花見どきには公園内を、花電気^で飾り、夜桜見物も大いに賑い盛大

この頃から、古平町の春の花見や秋の紅葉見物の名所になったのである。

山口金治さんは、大変造園に熱心な方であった。専門の庭師を呼び、多額の費用を投入して造成をし、着工してから七、八年くらいもたった大正十二、三年頃にはほぼ完成した。

イ山口金治さんは、大変造園に熱心な方であった。専門の庭師を呼び、多額の費用を投入して造成をし、着工してから七、八年くらいもたった大正十二、三年頃にはほぼ完成した。

なものであった。

美国・積丹・余市といった近郊からだけではなく、札幌方面からも多くの見物客があり、こうして積丹半島随一を誇る公園「偕楽園」となったのである。

古平町やこの地方を来訪する名士のほとんどは、新地や本陣の浜で船から下りると客馬車を走らせてやって来る。中にはきれいなバラソルをさした女の人たちもいて、それが珍しくて眺めていたものであった。

来訪した人たちは園内の別荘で休憩し、景勝を眺め、鮎や山女、海の珍珠を賞味しながら、

陸地は難所ばかり

(2)

ようやく海も凪いできたので船を出したが、途中からまた風が強くなり、ヨフユ岬を越えることができずその手前の浜の空小屋に泊まることになった。雨がもれ風が吹き込んでくるようなあばら屋で、船から苦など持ってきてそれを敷いて寝た。

翌日は快晴であったがやはり風が強く、しかし順風であったのでヨフユ岬を無事に越えたが、次第に波が高くなり

地元古平の銘酒「繚蘭」を酌んでは鯉沖揚げ音頭などを楽しんでいたようである。

こうした景勝の公園があったことから、当時の第九区部落会ではそれにちなんで部落会の名称も「古平町公園部落会」(会長小野寺地作)と改め、同時に市街に通じる本通りも「公園通り」と名づけたのである。

公園造成に着工してから、終戦になるまでの約三十年間というものは、すべて山口さんが自費によって管理してきたものであって、町民にとっては本当にありがたい、みんなが喜び、みんなが楽しんできたのである。

アイヌの《ことわざ》から 世間ばなし集

船の中にも波が入ってきた。このヨフユという所は切り立った崖が海岸まで迫っていて、海は青黒く深さは底知れず船を着ける所も無いので、やむをえず帆を低く下ろし走った。

この船には松前から付添の藩士二人も乗っていたが船は不得手とのことで、まるで重病人のようであった。

「救急車」！ そして無事退院

この度は私こと、何十年ぶりの入院で、今年の後半のスケジューリングはメチャクチャとなり、関係団体、また親しい友人に大変ご迷惑をかけました。正確にいうと七月十七日夜発病しすぐ蓮実病院に入院、発熱は四十度をこえた危険な状態であったよう、蓮実先生の適切な処置がなければ死んでいたかもしれない。運が良かったのか、二日目

故郷を想ひ 福井孝平

に小樽病院泌尿科へ救急車で運ばれました。

蓮実先生からの連絡とカルテ持参だったので、直ちに応急処置がとられ、泌尿科は満室だったので、とりあえず五階の内科に緊急入室させられました。その時も病院の先生方は、「蓮実先生の処置が良かったので、それで助かった」と、口々に言っておられました。

いろいろな検査で手術は少し遅れましたが、どうにか九月五日、無事退院することができました。

その後、九月十八日に再検査をしました。その結果もよろしく、今は徐々に体力の回復を待っている毎日です。紙上からですが、お見舞いやら激励の言葉をいただきありがとうございます。

退院して来てからは会う人ごと「大変だったね。」と声をかけられますが、家の者には悪いが、本人は結構楽しんで、いろいろと勉強になることもあったようです。これからは闘病日誌ならざる楽しい入院のあれこれ

れを、暇をみて書いてみたいと思っております。

まるつきりこれまでとは違う人間社会の一断面をのぞいて参りました。

病床のつれづれに

点滴の一粒ずつの夜の長き揚花火病窓からも楽しめて病窓の夜景とは別遠花火



郡境の山中で日没となる

川に沿って進んだが川は絶えず屈折し、岸の雪もまだ堅雪になっていないので足が埋まって歩きにくく、兩岸を見ては歩きやすい所をえらんで川の浅瀬をあちこちと渡りながら進んだ。雪は綿のように大変柔らかく、一足ずつ雪から足を抜くようにして歩き、浅瀬や岩を伝わって行ったが、氷の張りつめた川水は身を切られるように冷たく、ぬれた靴に雪がついて重くなっていく。木の根元などは、体の重いものが歩くと足をとられて歩きにくく、パレー氏のように大きい人はことのほか難儀であった。

明治13年 泊村茅沼炭坑から

古平行の記

両側を見ると山が連なり、エゾマツが多く生えていた。正面にひとときわ高い山が見えているが、木の間から見るとなかなか趣がある。これがアイヌのいうハナシ峠で、この山脈こそが岩内と古平地方の境なのだろうか。

さらに進むと道はこれまでとそれほど変わらないうが、高低差が著しくな

った。 ようやくにして頂上を越え、ふもとに近くなってきた川があったが、雪のためその広さはわからない。

この近くにはかねがね聞いていた鉾山があると思うが、雪が深くしてこのなかかわからない。時計を見るとうすでに午後三時を回っている。先を急がなければならぬ。

目の前の山を越えることになったが、雪はさらに深く五尺はゆうにある。進むのみなかなかどららない。浅野氏が元氣よくかけ声を出し、みんなもそれに合わせて声を出していたが、そのうち声も出なくなってきた。中腹にかかった頃辺りは薄暗くなり、急いで野営にか

れ落ちている所もあった。 さらにここから数丁ほど進んだ辺りから、溪流は次第に高低差が大きくなり、滝のように流

遙かなる故郷の思い出

鯨漁の歩方(ぶかた)の話

橘 義 春

- 13 -

やがて鯨場の歩方の人数も揃った。漁獲高の網元と若い衆の歩合はどうだったか忘れたが、大船頭は丸山町の前田さん、副船頭は港町の上田さん、起し船の船頭は獅子舞では名人の木村さん、副船頭は青森県出身のやん衆、磯舟乗りは松田のヒコさんと丸山町の建具師、帳場は新地町の丸玉さん、若い衆は浜町の大工さん、港町のちようちん屋さん、新地町のブリキ屋の上田靖君、樺太から一緒に復員してきた丸山町の倉島君、それに品田、藤野、山本さんらで、プロの漁師は意外と少なかった。

昭和のはじめに鉄興社が、今は廃山になった稲倉石鉦山を経営するようになりましたが、生産していたマンガンが重要な資源であったことから、鉦山は戦争中に大きな発展をしました。戦後も好調に生産を続け、千人程の人が働いていて、農家や商店の人たちも恩恵があったようです。

私たちが昭和十一年、太平洋戦争の始まりでもある支那事変なので黙っていた。漁の結果は不幸にも第二の心配ごとが的中し、惨たんたるもので、竹本漁場も隣の仲谷漁場も大損だったようである。

昭和二十三年、ほぼ同じメンバ―でまた歩方をやったが、今度は第一の心配ごとが的中してしまった。この日はなにかどんよりとした日であった。午後三時頃であつたらうか、突然鯨が群来て来て、それが隣の仲谷漁場の建網に突っ込んで行った。真昼の出来事で、たちまち浜には黒山の人だかりができた。網の中で産卵を始めたらしく、海

私の青春 「女子挺身隊員」として

竹内 こと

集められたのはみんな若い女の子たちで、それぞれの仕事の場所に配属されました。私は最初、出戸の沢の選鉦所に回されて、家から毎日遠い所を歩いて通ったものです。

やがて戦争が次第に拡大するにつれて、喜茂別のアスパラ工場などと二度三度と徴用で働きに出ました。

そして昭和十六年、大戦が始まるとさらに多くの男子が戦地に向かい、ますます女子の労働が増えてきました。

その後もまた稲倉石鉦山で働きましたが、よその町村からもいろいろな職業の人たちがたくさん徴用で来ていました。

←(次ページへ)

第一回国勢調査(大正九年)

記念の『鉄瓶』古平町で発見 全国で四番目に

日本での国勢調査は大正九年(一九二〇)が第一回目で、それから五年ごと(途中で臨時に行われた年がある)に行われ、西暦の末尾に〇がつく年、十年ごとに大規模な調査がある。今年は一九九五年なので、十七回目の国勢調査が十月一日に行われることになっている。

古平町での第一回目の国勢調査のときには、二十五人の調査員と五人の予備調査員が内閣から任命され、調査員は紋付き袴の正装に記章をつけて威儀を正し、調査にあたったという。

町では第一回国勢調査の記念として、調査員に『南部鉄びん』を贈ったがこれを大事に保存している人がいる。

ところで、今年の五月三日の道新にこんな見出しが大きく出ていた。

『第一回国勢調査記念品の鉄瓶 函館の元教員が保存』

この新聞記事によると、第一回目の国勢調査の時には都道府県がそれぞれ記念品を贈っていたが、初回の記念品が確認され

10月1日 第16回国勢調査

たのは全国で三例目で(総務庁の話)、道の開拓記念館で所蔵しているのは第二回目的のものである。

そうであればこの『鉄びん』は全国で四番目ということになり、まさに貴重品である。

当時、祖父が調査員をしていて贈られたもので、見たところ保存状態も良いようである。表面には「大日本帝國第一回国勢調査記念」の文字と当時の日本の領土が浮き彫りになっていて、下に「大正九年十月一日」とあり、蓋の裏には「古平町役場」と書いてある。また、当時の調査員が付けた記章も一緒に保管されていて、記章の表には冠をかぶり、笏

(しゃく)を持った人物の上半身があり(誰であるかは不詳)裏には「大正九年十月一日國勢調査記念章」の文字がある。

新聞の写真で見る鉄びんの図柄は、日本領土と付近の地図が大きく描かれているが、この鉄びんのは直径七センチほどの

円内に描かれている。

総務庁によると、当時の調査員は全国で約二十四万七千人というから、当然それだけの鉄びんがあつたはずであるが、現在確認されているのはわずかに三個、古平で見つかったのを加えても四個とは余りにも少な過ぎるように思われる。これまでに見つかったのは北海道で二個、そのうちの一個が、現在、総務庁統計資料館に所蔵され、ほかの一個は岩手県で見つかったものだという。(新聞に出ていた鉄びんは、音更町役場とある)

今回、古平町で見つかった鉄びんは専門家が確認したわけではないが、書かれている文字や記念章もあることから考えて、全国で第四例目であることは間違いない。

熱心な人によって、町内からこのような発見があつたことは大変喜ばしいことです。

(前ページから) 青春時代もなにもありませんでした。ただ「国のため」という気持ちでそれこそ夢中で働いたものです。そのころは食糧難の時代でしたが、軍需用の重要資源を生産しているということで、魚や野菜などはほとんど鉾山に運ばれて来たようです。

昭和十九年の年末、縁があつて今のところへ嫁ぎましたが、結婚したということでは挺身隊からはずされました。

翌年の八月終戦になりましたが、そのひと月前の七月十五日に古平港を襲った敵の戦闘機の爆撃を受けて、折から鉾石を積み込み中の運搬船とはしげが沈められ、二十人余りの犠牲者が出ました。本当に痛ましいことでした。

あんなに繁栄をした稲倉石鉾山も、昭和五十九年にとうとう廃山になってしまいました。戦時中働いたことのある鉾山の跡もすっかり無くなってしまい、戦後五十年という歳月を私の青春時代を通じて考えています。

先日、稲倉石鉾山に勤めていたことのある宮森栄蔵さんとお話をする機会がありました。いろいろと懐かしいお話を聞かせていただいていたがとうござい

ました。



第一回国勢調査